朝日新聞連載「ある生活」

日本人の暮らし

朝日新聞社社会部編・修道社刊

日本人の暮らし

朝日新聞社会部編

日本人の暮らし

―― ある生活 ――

昭和三十一年六月二十五日　初版印刷
昭和三十一年七月　五　日　初版発行

定価　一二〇円

著者　朝日新聞社会部篇

発行者　東京都中央区日本橋小舟町二ノ四　秋山修道

印刷者　東京都北区神谷町一ノ六一　原田憲次郎

発行所　東京都中央区日本橋小舟町二ノ四　株式会社　修道社
電話茅場町(66)二五四・四〇八三
振替口座(東京)六一六九一

落丁・乱丁はお取替えいたします

一愛読者として

日本を支える人々の姿

亀井勝一郎

「朝日新聞」に一週一回この記事がのるときが、私にとっては何よりのたのしみである。日本のあらゆる方面の庶民生活が、具体的に語られているが、そこに何らの先入見もなければ誇張もない。平凡な日常生活の苦しみと喜びを、あたりまえの筆致でかいている。この報告のひとつの魅力はそこにあると云ってよからう。筆者の解釈といったものも目だたない。謙虚な筆であって私はいつも好ましい文章だと思って読んできた。最近の新聞記事の中で出色のものであろう。

こゝに描かれた生活はいづれも楽なものではない。生活に耐えてゆく姿が、実にはっきりと出ている。しかしさうかと云って、ことさら暗い面をあらはにしているのではなく、苦しい中にも一筋の喜びと光明を告げているものが少くない。苦労を他人に向って誇示していない点が実にい

い。

私はこれを読んでいて、日本の土台骨を感じた。すべて無名の人々だが、彼らこそ日本を支へている人々ではないか。先覚者風の先走った考へもなく、さうかといって生活苦のためいぢけている風もない。「一日の苦労は一日にて足れり」という聖書の言葉を、黙って実行している人々のやうに思はれた。こゝに真の生活者がいる。これらの人々が社会の不正に対して怒りを発したときが、ほんとうに恐ろしいのではなからうか。

レポート文学の成長

平林たい子

新聞にのったとき、この生活報告を愛読した。以前このたぐいのレポートは、異常なものに対する興味からはじまって、特殊なものへ拡大して行った。これがこのように何の変ったところもない、むしろ、変っていないが故に誰れにも興味をもたれる生活の報告にまで発展したといふことは、レポート文学の非常な成長であり、生活認識の高級化である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

このレポートが今回一冊の本になって出ることは、時宜を得ている。あえて文学の愛好家でなくとも、自分の住む狭い社会のそとにある他の社会の生活への見聞をひろめるために、誰でもよんでよい。文章も行きとどいていて、深刻がらず、冗がなく淡々として、肩を凝らせずによめる。

地に着いた好企劃

池島信平

朝日新聞連載の「或る生活」は、愛読しているものの一つである。日本人の平均のうえの生活と意見が、淡々として書いてあり、読んでみて気持ちのよいものである。

ジャーナリズムというものは、本質上、どうしても異状なものに焦点が向うのは当然だが、こうした記事を読むと、いまさらながら「尋常」というものの意味の深さに、心うたれるのである。

雑誌の編集者をやっていると、よく読者から「知名人の原稿ばかり載せずに、無名の者のものを掲載したらどうか」という手紙をいたゞく。まことに御尤もな希望であるが、無名とはいへ、

これが記事となれば一応の価値あるものが出来なければ、商業ジャーナリズムの立場から、採用出来ない。この点で、無名の人の書くものは、どうしても、誌面に現れにくくなる。

しかし、この人たちの声を無視することは許されない。これをどうした形で、紙面に具体化するか——朝日新聞の試みは、成功だったと思う。人選もよいし、筆致もよい。とかく感傷的に、あるひは激越に扱いたくなるところを、程よく押へている記者諸君の感覚は相当のものである。

「或る生活」は、近来珍らしく、地に着いた好読物である。

目次

一愛読者として

日本を支える人々の姿……亀井勝一郎…一

レポート文学の成長……平林たい子…二

地についた好企劃……池島信平…三

妻は希望捨てず……運送会社員　妹尾憲一さん…一
所を得ない獣医の夫

冷雨ついて勧誘に……保険外交員　佐野久子さん…八
付きまとう貧困と誘惑

商売一本はいや……本屋　森田益次郎さん…一六
自分もともども勉強を

土にまみれて四十年……農民　互作蔵さん…三三
楽しみは収穫後の祝い酒

十人の子供と共に……木琴製造業　折笠弥須さん…三〇
労苦〃吹消す笑の合唱〃
原爆症で死んだ子……中労委文書課長　林　芳郎さん…三七
次代の人々を守りたい
百人百様の手当法……看　護　婦　鈴木チズ子さん…四四
神よりも科学を信じる
「水揚げ」に迫われて……タクシー運転手　熊谷光行さん…五一
食えるだけ固定給を
つきまとう寂しさ……ファッション・モデル　佐原英子さん…五九
演劇はぜひやりたい
身にしみる「非情」……夜間学生　芹沢　修君…六六
就職締め出しの夜間卒　中央大学第二経済学部
友達と手を結んで……女中さん　筑井まり子さん…七三
冷たい言葉〃女中のくせに〃
酔客に殴られても……有楽町駅員　川島新一さん…八一
ホームに立って十年間

他力本願はきらい……いそ付漁師　千代川幸吉さん……八六
計画たて、仕事に打込む
夫婦ケンカも卒業……小学校教員　伊藤郁子さん……九五
私は一生、先生を続ける
毎日が楽しくて……バス・ガール　堀　松栄さん……一〇三
十年間明るく闘い抜く
「青ガエル」の気持……ニコヨン　藤野一平さん……一〇九
少しでも飛び上りたい
結核との闘い一二十年……医学者　千葉保之博士……一一七
高い医療器や薬に憤り
辛さに耐えて四年……街頭宝クジ売り　酒井きく子さん……一二五
病床の夫を励しながら
一夜に三回もの出動……消防士　早川弥平さん……一三三
火への闘志が単調救う
際限ない貧困との闘い……民生委員　佐藤弥作さん……一三九
税込み一年四百円の手当で

貸倒れと酔っ払いと……バーのマダム　杉田菊枝さん…一四六
銀座裏三十年の〝女給小夜子〟
少ない退職金頼りに……郵便集配手　高橋新蔵さん…一五四
赤自転車と共に二十年
運や偶然は信じない……証券会社社長　藤波　剛さん…一六一
相場師でなく立派な〝セールスマン〟
恋愛も開墾と一体で……開拓者　高木憲男さん…一六八
〝汗〟にプラス〝新知識〟
一番ほしい「時間」……アルバイト学生　鈴木美和子さん…一七六
帰途、泣いた事も何度か
働く中に生きがい……元傷病軍人の工場長　稲垣　茂さん…一八二
白衣募金には暗い気持で
老父を楽にさせたい……美容師　林　栄子さん…一八八
独立三年、結婚もいまでは悩み
変転十二年、日雇いも……炭屋（小笠原島引揚者）　前田　定さん…一九五
島へ帰る日を夢みて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〝走り〟に打込む九年間……映画助監督　井上芳夫さん……二〇三
へボ詩人になるよりは大監督に
内臓までもまっ黒……煙突掃除　森田巳之助さん……二一一
文明進歩で商売は繁盛
あとがき……朝日新聞東京本社社会部長　宮本英夫……二一九

妻は〝希望〟すてず

所を得ない獣医の夫

運送会社員　妹尾憲一さん

東京都杉並区天沼、この辺は勤め人階級の密集地帯で、いわゆる「中央線サラリーマン」の一つの中心地、朝夕の荻窪駅のラッシュはこの辺の各家庭の主人公を吸ったり吐いたり、乗客の多さに荻窪駅はさきごろ改築して階段を広くしたほどだ。

このラッシュの中に、新橋にある運送会社社員、三十九歳、妹尾憲一氏の五尺六寸、十七貫の姿もまじっている。ロイド眼鏡をかけた堅実なタイプだ。駅北口から歩くと二十分の距離、三丁目五六五に家がある。この人に焦点を合わせて見よう。

快適な家、とはいいにくい。六疊、二疊の二間、ガス、水道付、だが縁側のない借家、家賃は現在三千円である。人間ひとり入れる玄関にはリンゴ箱のゲタ箱、小さなバケツに子供のオモチャらしい石ガメが二匹生きている。家族は奥さんの英子さん（三一）一人息子の長男篤君（七歳）はすぐ近くの沓掛小学校一年生だ。

妹尾さんはこの月の十六日に千葉柏市に引越す予定である。家主さんに立退くよういわれてから苦労の十カ月、やっと安住の地へ転居するわけだ。家財は奥さんのミシン、小型の茶ダンスくらいなので、引越しに苦労はない。奥さんものんきに構えている。あとは家主の長男の新夫婦が十一月から入ることになっている。

妹尾さんはタバコを日に一箱のほかは、酒はほとんど飲まぬ。飲んでもビール一本くらいです

ぐ寝てしまう。学生時分にいろいろスポーツはやったが、いまはやらず別にこれといった娯楽もない。少し前にパチンコを少々やったが損ばかりするのでやめた。朝は七時半に家を出る。夜はたいてい六時半に帰宅、新聞をたんねんに読む。そのあと畜産や家畜の古い本を開く。

妹尾さんは昭和十二年当時の東京高等獣医学校の出身である。卒業してすぐ朝鮮総督府に就職、北鮮の明川種羊場に勤務、やがて現業主任になったが、六年たった十八年一月三日に現地召集をうけ陸軍二等兵としてラバウルに連れてゆかれた。散々な目にあったが、からくも生きのび、二十一年四月、内地に帰還した。白髪が多いのはその時の栄養失調と苦労のせいである。実家が吉祥寺にあるので、そこへ落ちつき、二月後に埼玉県の牧場長として就職した。

二十二年の暮には北海道高女を出たいまの奥さんと見合結婚、間もなく妹尾さんは牧場経営のやりかたについて専務と意見が合わずそこをやめた。三カ月後牧場の方から「考え直してくれ」と話があり、もう一度勤めたがまた衝突、月給も安すぎ生活も苦しいので辞表を出した。

失業したので職探しに職安を歩き廻った。畜産関係では全然求人がない。「専門学校卒の学歴はかえって邪魔になる」と職安でいうので、遂に中学卒として、現在の運送会社に入社、全然畑違いの方向へ生活のスタートを切り直したのである。だが、妹尾さんは家畜への愛着もあれば、獣医技術の自信もある。読書もついその方になるのである。

さて、現在の家に引越したのは二十六年の夏だ。実家で同居三年の間に、よくあるように奥さ

んとおシュウトさんの同居はうまくゆかぬ。別居するために夫婦で家を探し、荻窪駅前の周旋屋の手で現在の建坪七坪の家を権利金四万円、家賃千五百円で借りた。（昨年からは三千円に値上げ）周旋屋には権利金の一割、四千円を払い、ガス、水道をつける金に六千円、五万円の金がかかるので、親類を走り回って四万円借り、貯金一万円を出した。当時八千円の給料だった。

家主はすぐ近くのサラリーマンだ。よく世話してくれるいい人だったが、長男が結婚するというので昨年暮れに立退いてくれといった。妹尾さん夫婦は、かつ驚き、かつ弱りきったのである。

都営住宅には八回申込んだが全く当らない。一番違いではずれたりして、行く先がない。どうしようかと途方にくれた。

奥さんの父は茨城県猿島郡岩井町で弁護士をしている。奥さんは必死に実家に頼んだ。見かねた実家では、柏駅から十二分の場所に九坪の家を買ってくれた。ガス、水道がなく、少々通勤に時間がかかっても、今度は絶体に追立てられる心配はない。だが妹尾さんは別にうれしそうでもない。それどころか、サラリーマンによくあるように、心の疲れが感じられる。無口な方で、仕事はまじめだが、あまりつき合いを好まぬ。家庭的で坊やを非常に可愛がる。

「主人は可哀そうだ、と思うんですよ。会社でもヒラ社員で誰にも威張れない。せめて家でくらい威張らしてあげようと思って、わたしは、主人が帰ってくると手をついて迎えます。気の毒

ですもの」

「この間、主人にこういったンですよ。〃わたしは今度生れ変ったら男に生れてやるわ。バリバリ仕事もして、愛人も何人もつくって楽しむつもり〃冗談をいったら主人は〃そうか、お前はまだ人生に絶望してないんだなア。女ってたのもしいねえ。ぼくはもうこんな人生に二度と生れて来たくないよ〃としみじみいうんですよ」

奥さんから聞いた話だ。明るい性格の奥さんである。

御主人の月給が先月分二万三百四十六円、税金七百三十円を引き、家賃を払ったあとの一万五六千円の実収では奥さんのヤリクリは大変だ。水道料二百円、ガスはメーターをニラんで計算、電灯料は十七キロ以内の百八十二円、牛乳、新聞代、こうしたゼヒ要る金はまず最初に天引して別の袋に入れる。家賃は滞らないように前払い。病気をすると予算生活は一度に崩れるから、生活の重点を食に置いて、できるだけ栄養をとる。

「主人は昔から月給袋の封を切らず、ソックリくれるんです。気持がうれしくて、わたしのものは買えません」と奥さんはいう。一向にジメジメしない。「今夜はムリしましょうよ」御主人をうながして、月に一回くらいオデオン座に洋画を見にゆく。

妹尾さんの心の底にあるユゥウッは妻子を養うため、専門の好きな道をすてて生きてゆくことだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com